

14th FEFCO

Forest Ecosystem Function Colloquium (FEFCO) は、地域や地球全体のレベルで森林生態系の機能とその持続的活用法を統合的に理解することを目的とし、研究者間の学術交流を推進します。
<http://www.bluemoon.kais.kyoto-u.ac.jp/FEFCO/index.html>

定例会として第14回森林生態系機能コロキウム (FEFCO)を開催します。どなたでも参加できます。京都大学農学研究科森林生物学研究室がホストを務めます。

14th FEFCO 2014/11/20 16:30 - 18:00 Faculty of Agriculture Main Building, S174 定例会

井鷲裕司・高柳 敦・山崎理正 (森林生物学研究室)

1.井鷲裕司 遺伝解析に基づく 森林生物の動態・ 保全・進化研究

遺伝情報が広く生態学研究に用いられるようになって20年あまりが経過したが、ここ数年の解析技術の発展は著しいものがある。例えば、数日の作業で解読できるDNA塩基配列数は5年前は数万塩基であったが、現在では数億~数十億塩基にも達する。この様な状況をどのように活用すれば、森林生物の動態や進化プロセスを理解し、生物多様性の効果的かつ適切な保全につなげられるのだろうか。実例を紹介しつつ考察する。

2.高柳 敦 シカによる 自然植生の改変と 生態系のレスト レーション

シカによって自然植生が大きく変容していることが明らかになり、生態系“被害”とされて対策が立てられている。その時に、何を持って被害とするのかやどのような生態系に戻すのかについては、科学的な基準は明確でなく、相観や景観が主な基準とされている。また、この現象を食い止めて植生を回復するには、シカの個体数密度を小さくすることが求められ、それが適正密度が存在するという考えと結びついて捕獲事業が行われている。芦生研究林の状況を中心に、私に関係しているいくつかのシカによる植生改変問題とその回復事業について紹介しながら、シカによる植生改変問題へのアプローチについて検討する。

3.山崎理正 冷温帯林における ブナ科樹木萎凋病 の被害拡大様式

ミズナラやコナラが集団的に枯死するブナ科樹木萎凋病 (ナラ枯れ) の被害が日本各地に拡大し、問題となっている。本病は養菌性キクイムシであるカシノナガキクイムシが古い寄主木から新しい寄主木に移動分散する際に、食餌菌と一緒に病原菌も運搬することで被害が拡大していく。カシノナガキクイムシの移動分散と林内における寄主候補木の分布が、被害拡大様式を決定していると考えられる。本病の被害拡大について、冷温帯に位置する芦生研究林と八丁平湿原周辺の二次林で行ってきた研究を紹介する。